

地域における草の根の活動実践者の語りから学ぶ

—①こども食堂の活動の始まりを知る—

大西喜一郎*

こども食堂の創始者である近藤博子と、その全国的普及の発端となった山田和夫の活動の開始期に焦点を当て、活動理論の枠組みで分析した。二人とも最初からこども食堂を始めようと意図していたのではなく、活動の動機も違った。近藤は、労働と地域社会の抱える内的矛盾に対する自身の働き方の変更の過程で、山田は、期せずして地域にひとり残され退職後の人生の歩み方を模索する過程で、こども食堂開設に至ったが、これは、ネットワークの概念で説明できる。すなわち、他者や外部環境との交互作用の場であるネット（結び目）を日々生成し、多様なやり取りの連鎖と試行錯誤の末に、自分の店や家を地域に開き（住み開き）、こども食堂を始めていた。

キーワード：活動、こども食堂、ネットワーク、交互作用、住み開き

はじめに

近年社会福祉領域において、生活に困難を抱えながらも適切な支援に繋がらず、地域の中で孤立し、次第に問題が深刻化する事例が増えている。これらは、虐待、不登校、ひきこもり、貧困、孤独死など、様々な様相を呈して表れる。

社会福祉で扱う生活上の課題は、経済と密接に関連している。日米の金融自由化の帰結として1991年以降バブル経済が崩壊し、不良金融資産の調整過程が先行し、企業向け貸し渋りによる信用ひっ迫が発生し、在庫調整と重なり連動した（近藤，2011・宮崎，1995）。金融機能が麻痺し、国内製造業は衰退し、企業は経営戦略の見直しを迫られ、高度経済成長期に確立した男性正社員の年功序列型終身雇用制は、維持不能となった。新卒採用の削減、非正規雇用化の拡大などで雇用が流動化し、2008年9月のリーマンショック後は、派遣社員の雇止め（派遣切り）が頻発した。

2000年頃から「就活」、2008年頃から「婚活」

という言葉が、それぞれ流行したが、若い世代の誰もがうまく就職・結婚できる時代ではなくなった。少子高齢化の進展と相まって単身世帯が増え、家庭・職場・地域など、生活のさまざまな場において支え合いの基盤が弱まり、ひとり親世帯も増え、人間関係が希薄化するなかで孤立するリスクが高まったといえよう。

この問題をより身近に引き寄せて考えてみる。近所づきあいの程度について、よく（親しく）つきあっていると回答した者の割合は、1975年は52.8%で、1997年までは4割を超えていたが、2011年には2割へと半減し、2019年には17%まで低下した。望ましい近所づきあいについて、「地域の行事や会合に参加したり、困ったときに助け合う」と答えた者の割合は、大都市部では29.5%で、子育て世代（30歳から49歳まで）の女性では34%であった。都市の規模が大きくなるほど、また若い世代ほど減少する傾向がみられる（内閣府，2019）。

今の高齢者には、日本が経済的にまだ貧しかった頃、近隣同士で助け合いながら暮らした経

*おおにし きいちろう 日本福祉大学

験もあるが、2000年4月から介護保険サービスが始まり、要介護高齢者の日常生活に浸透してきている。心身が徐々に衰えていく過程で、外出や自治会での活動も難しくなり、自分の事で精一杯の状態になり、自発的な近所同士のちょっとした気遣いや、助け合いも難しくなる。本当は、自分も家事などを助けてほしいが（みずほ情報総研, 2012）、他人に言えず、辛抱して過ごしている。近隣の顔なじみの高齢者が介護保険のサービスに繋がると、一定の技能を持つ専門職によって処遇されるので、あえて近隣住民が関わる必要もないと思ってしまう。その結果、近所づきあいが減り、関係性が希薄化する。隣の家に住む人との関わりがなくなる事も珍しくない。三世代が同居する世帯も大幅に減って近隣の家族同士が関わる機会も少なくなり、プライバシー尊重の風潮と相まって、自分の家族以外の人々の暮らしぶりを外から窺い知ることも難しくなった。他人の生活領域に立ち入らずに暮らすことが普通になってしまい、異なる世代の人々との関わり方が分からなくなり始めている。

若い世代には、そもそも近所付き合いの経験が乏しい人も多く考えられる。そして、日常生活場面でちょっとした困り事が解決できなくなる場面が増えている。問題は早期に発見し、早めに解決に向けて動き出すことが重要である。しかし、他者との関わり合いを敬遠しがちな日本の現状を鑑みると、誰に、どのように相談したり、助けてもらえばいいか、分からなかったり、近隣の住民に助けを求められない人が増えているように筆者は考える。

行政は、2000年に福祉サービスに共通する基本的事項を規定した社会福祉法において、地域住民等は互いに協力し、福祉サービスを必要とする住民が地域社会の構成員として、日常生活をはじめ、社会、教育、経済、文化など、あらゆる分野の活動に参加できるように、地域福祉の推進に努めるよう定めた。そして、基礎自治体である市町村には、(1) 地域住民の交流拠点の整備等の地域づくりに取り組み、(2) 身近な地域で住民のあらゆる相談を包括的に受付する場を整備し、(3) 相談支援機関などが協働し、

課題解決するネットワークを整備するよう、努力義務を課した。現在高齢者を担当している地域包括支援センターの中には、障がい者や子どもを含むあらゆる世代の相談支援を実施する体制を整えようと、多機関型包括的支援体制構築モデル事業を始めているところもある。但し、自治体の人的・財政的資源だけでは住民からのニーズに対処しきれないので、住民に主体的な参画を求める姿勢を強めてもいる。

一方で、我が町は将来どうなってしまうのかという不安な思いや、自分や家族が直面した問題や課題をきっかけに地域社会の問題を考え始める住民も多い。地域の未来は、「我が事」を起点に描き始められる。また、地域住民の困りごとを放っておかず、解決に向け、仲間を募り、今の自分達にできることから活動を始める人々もいる。しかし、活動を始めたいと思っても、どのように開始すればよいか分からず、躊躇してしまう事が多い。結局、想いだけで終わり、活動に至らぬ事も多いのではなからうか。もし、活動を円滑に進められる仕組みが分かれば、多くの人々にとって福音となるであろう。

さて、エンゲストロームは、新しい実践活動を集团的に創造していくための協働学習を「拡張的学習」として位置づけ、「活動理論」としてモデル化した（Engeström, 1999）。地域住民が我が事として、主体的に取り組み始めた活動実践について、エンゲストロームの理論枠組みを援用して検討することは、今後、地域福祉・子ども福祉領域における活動の充実を図る際に、有益なヒントを提供するものと期待できる。

そこで、今回筆者は、今後活動を始める際の参考に供するべく、草の根の活動実践者の語りを分析し、地域における子ども支援活動の立ち上がり方に焦点を当てて、考察したい。

本稿では、2012年に東京都の地域住民による「こども食堂」の活動が始まるまでの過程に焦点を当てて、検討する。具体的には、こども食堂の創始者とされる東京都大田区「きまぐれ八百屋だんだん」店主の近藤博子氏（以後近藤と記す）と、その活動を模倣した、山田和夫氏（以下山田と記す）を調査対象とする。近藤と山田に関する記事・インタビュー・書籍・論文・講

演記録・動画などを収集し、これらの資料等を用いて、活動の発端に注目し、活動が如何にして始まったのか、当事者の語りを中心に分析した。なお、複数のインタビュー記事を比較し、記述内容に差異がみられた場合は、本人及び所属組織の著作・編集・出演による書籍、論文、記事（ブログ）、動画等を優先して分析した。なお、本稿では基本的には「こども食堂」と表記するが、山田と山田の所属する団体では「子ども食堂」と記述しているので、山田の食堂を指す場合は、子ども食堂と表記する。

1. こども食堂の活動実践者の語り

（1-1）近藤の「きまぐれ八百屋だんだん」

東京都大田区で野菜と自然食品の店を営む近藤は、1959年に島根県で生まれ、県内の高校を卒業後上京し、歯科医院の住み込みの歯科衛生士見習いとして、昼間は歯科衛生士学校に通いながら、資格を取得した（中央法規，2018a）。その後3人の子育てをしながら、新聞社の診療所で働いていた。仕事柄、社員たちは深夜まで働き、食事は不規則となりがちで、忙しさと疲れから歯を磨く余裕もなく、自ずと歯は傷む。近藤は、生活リズムを変えなければ、歯磨き指導しても社員の虫歯や歯周病は防げないと痛感した（川口，2011）。また医療職として、社員が退職する際に地域での生活に円滑に移行できるようなシステムを作りたいと考えたが、大きな組織の中では叶わないと悟った（近藤，2016a）。勤務の傍ら、保育園で歯磨きのボランティアを長年続けるなかで、子どもの食生活も気がかりであった。また、「お母さんの仕事場を見たことがない」と言われ、昼間は近くにおらず子が不安がっていることにも気づかされた。

2007年に地域の中で医療職として活動すると決め、地元の歯科医院や保健所でのパートの仕事に切り替えた。また、友人の自然食品の店を手伝い、店のチラシに歯の話を掲載した。更に栃木県益子で農薬も化学肥料も使わず循環型農業を実践する青年農家から直接仕入れた野菜を、配達してほしいと頼まれた。週末の3日間、暫くは賃貸料なしで地元の商店街の元居酒屋の居ぬきの空店舗を貸してもらえることになり、夫

の助けも得て、野菜の宅配を始めた。商売の経験も開業資金もなかったが、歯と健康と食をつなげる仕事になるかもしれないとの思いはあった（近藤，2016b）。

ある日、朝採りの大根を目にした通りがかりのおばあちゃんから「あらーっ！こんな元気な野菜は久しぶり。私にも売ってくださいな。葉っぱも美味しそうだね」と声がかかった（近藤，2018）。少しならばと応じていると、平日にも店を開けて野菜を売ってほしいと頼まれた。2008年、平日の午後に不定期営業する店の屋号に、故郷の島根県の方言でありがとうを意味する「だんだん」を入れ、「きまぐれ八百屋だんだん」とした。野菜は新鮮でおいしく、客にも好評で、離乳食を作るために安全な野菜を求めて若い母親も来店した。農家で育った近藤は、元気な野菜は人を笑顔にし、元気にしてくれる事に改めて気づかされた。次第に買い物に来た客が身の上話をするようになった。自然と店が買い物客の溜まり場となり、1日中誰とも話をしない日が多いひとり暮らしの高齢者や、都会でひとり子育てに悩む若い母親などが地域に多いことを肌身で知った。

（1-2）「夏休みの学習会」から「ワンコイン 寺子屋」「みちくさ寺子屋」へ発展

2009年、近藤の子が高校生になり、勉強で躓き、学習塾講師の経験のある知人に相談すると、店の小上がり（畳5帖）の間で夏休みの2週間、教えてもらえることになった。近所の母親にも声をかけ、店で学習会を開いたところ、小学校4年生から中学校3年生まで7人集まった。講師は、勉強の仕方から教えてくれたので、好評を得た。中学3年生のふたりの女子からは、9月以降も続けてほしいと頼まれた。話を聞くと、ひとり兄弟が多く、自分だけ月謝の高い塾に通わせてほしいとは親にも言えず悩んでいた。もうひとは、自分の勉強の出来なさが余計に分かるから塾には行きたくないと話した。講師に相談すると、土曜日の18時から2時間、分からないところを教わりにくるという形にして、1時間500円で引き受けてくれて、「ワンコイン 寺子屋」が始まった。近藤自身、まだ延長保育

もなく携帯電話も普及していない時代に保育園や学童保育を利用する母親仲間などに支えられて3人の子育てを乗り越えてきたので、いつか地域に恩返しをしたいとも考えていた(近藤, 2016c)。そして、近藤はおやつを差し入れ、子どもと一緒に餅や芋を焼いて、楽しく過ごした。東京新聞が、その様子を2010年2月19日の朝刊紙面で、ボランティア講師募集と告知入りの記事にしてくれた(近藤, 2010)。子どもたちと関わりたいと、教育に関心のある学生や、現役を引退したシニア層などから、ボランティアの申し出を受けた。その多くが定着してくれたので、平日の放課後に宿題をする場として店を無料開放し、「みちくさ寺子屋」が始まった。近藤は自身の子育てを通して、母親が帰宅したときに子が宿題を済ませておいてくれれば、気持ちが楽になり、夕食後の時間を親子で少しゆっくり過ごせることが分かっていた。実際に、勉強を巡って母子関係が険悪だった男子児童が、店で宿題をするようになり、親子関係も改善し、心配していた学校の教師も驚いた。その児童が友達を連れてくるようになり、店は学童保育の場と化した。お腹がへった、喉が渴いたと子どもが言うと、近藤はみかんなどを差し入れた。

ワンコイン寺子屋を始めた当時、近藤は店のテナント料などの経費を何とか自分ひとりで捻出しようと努めたが、野菜と自然食品の販売では、賄いきれず、自分の給料もなく、生活のために歯科衛生士のアルバイトを続けながら店を守った。寺子屋の講師が「みんなで使う場所にするということで、みんなで場所代を負担した方がいい」と提案してくれて、寺子屋で集まったお金の3割を場所代として納めてもらえることになった(中央法規, 2018b)。子どもが店で勉強しだすと、大人たちからも勉強してみたいという声があがり、英会話や手話、哲学カフェなどが始まり、盛んになった。

(1-3) バナナがごはん代わりの児童とこども食堂の開設

2010年、近隣の小学校の女性副校長が、野菜を買いに立ち寄った際に、「近藤さん、今年の1年生の中に、お母さんが心の病を抱えていて食

事も作れなくて、給食以外の晩ごはんは朝ごはんをバナナ1本で過ごしている子どもがいるの。私がおにぎりを作って持って行って保健室で食べさせ、お昼は給食を食べさせるようにしているのよ」さらに「お金をもらっても、コンビニでお菓子を買ってしまうんだよね」と話した。近藤は、今飽食の日本にそんな子がいることに驚き、精神を病むと家事もできなくなることを知り、ぽつんとひとりでバナナを食べている子を思い浮かべると切なくなり、思わず涙を流しながら、店には厨房もあるし、小上がりもあるので、ここでなんとか食べることをやりましょうと、ふと思ったことを口にした。「そんなことができれば嬉しいわ。」と教諭は応じた。この女性教諭と近藤の会話が、こども食堂の原点となった。その教諭からは、おにぎりを作って朝にはその子を迎えに行き、登校後まず食事を与えるなど世話をしている事や、学校の教員間でも、そこまでする必要があるのかと賛否両論があった事も聞いた。近藤は、毎日の食事にも事欠くような、養育の助けが必要な子どもは、地域でも支えるべきであると考え、パン屋を経営している仲間やNPO法人などとも相談し、賛同を得た。食材は「だんだん」の持ち出しで構わないと思っていた。だが、困難を抱える子どもだけに利用者を限定すると、差別にもなる。さらに困窮状態にある子を探し出すのは、個人情報の問題があり難しいので、すべての子を対象にするべきだと当初から決めていた。しかし、調理の分担、活動資金の調達や料金設定など、具体的な運営のノウハウが分からなかった。仲間も忙しく、プランは具体化しないまま1年半が過ぎようとする頃に、そのバナナの子が児童養護施設に入所したことを耳にした。その子のためにも始めるつもりだったのに、間に合わず、後悔した。

1日も早く食堂を開かなければと、メニューはカレーに決めて、気になる子がいたら一緒に誘ってほしいと買い物に来た母親に手書きのピラを配った。仲間が仕事帰りに手伝ってくれることになり、2012年8月29日に店の一角で、「こども食堂」を始めた。近藤の考えるこども食堂とは、「子どもがひとりで来ても怪しまれること

なく気軽にに入れて、無料または低額でごはんが食べられる」食堂である。親子連れでも、ひとり暮らしの高齢者でも構わない。初日は、子どもが18人やってきた（近藤，2017）。9月から月2回水曜日の夕方5時半から開店し、野菜でメニューを組んだ。子どもたちはとても楽しんで食べてくれ、食後は読み聞かせや、話をして過ごし、交流の場となった。野菜嫌いの子どもも、自然に残さず食べられるようになり、母親からも喜ばれた。

こども食堂を始めるにあたり、今の子どもと母親に適切な関わりができるようにと、近藤は近隣の児童館に教を請うた。そして、児童館の見守り会員の活動メンバーとして、折り紙教室の講師などを務めながら、子どもに顔を覚えてもらい、また何でも気軽に話のできる歯科衛生士として、母親とも付き合うようにした。更に、地域の保育園や児童養護施設などで歯磨きボランティアを継続している。

近藤は、子どもに限らず、地域のすべての世代がつながる居場所として店を提供し続けている。街中の飲食店を利用しづらい障がいのある子ども親子で利用している。あまり福祉を意識せず、ちょっとした住民同士のふれあい・助け合いとして、自然体で活動している。宿題をする場として開いた「みちくさ寺子屋」に初めてやってきた子は、その後自発的に年下の子どもの世話をしてくれるようになった事、最初母親の自転車に乗せられて店に来ていた自閉症の子が、ひとりで来られるようになった事、夜間中学に通い中学1年生の教科を勉強する8代の高齢者を中学2年生の子どもが学習支援する様子などを嬉しい成長として報告している（近藤，2019）。

（2-1）「池袋あさやけベーカリー」山田の来訪

ある日「だんだん」の運営仲間でパン職人の伊藤氏が、豊島区池袋でホームレスの人々に配るパンを無料で焼いている山田を「だんだんこども食堂」に連れてきた。以下は、山田の著書に依拠して述べる（山田，2015）。

1948年、東京都豊島区の池袋の要町で生まれ育った山田は、職場で出会った妻と1974年に結婚した。夫婦とふたりの息子と山田の両親の6

人は、共に山田の生家で暮らしていた。妻は、子どもの学校のPTAの3人の仲間とガレージセールで出品しようとパンを焼き始め、やがて自宅を改造し、1989年に「こんがりパンや」を開店した。子育て中の主婦として、食の安心と安全を最優先し、無農薬野菜と無添加の食材を使い、国産小麦と天然酵母で焼いたパンは、おいしいと評判になった。気温や室温次第で変動する天然酵母の発酵に合わせて午前3時頃から作業するため、パンを焼く日の睡眠時間は、三、四時間となり、過酷でもあった。請われて、2000年からはパン作りの教室も始めた。山田は、息子たちと自分の昼食用の弁当や父母の食事を作るなど、妻に協力した。経営も軌道に乗り、2005年には山田家の生計を支えるほどになった。2008年に会社を定年退職した山田は、第二の人生で妻たちとパンを焼こうと楽しみにしていた。ところが、妻が膵臓がん末期と判明し、5か月の闘病後、2009年8月に逝去した。

山田の妻は、請われて2008年から売れ残ったパンを週1回ホームレス支援の団体「TENOHASI（てのはし）」に寄付し始めていた。亡くなる3週間前、妻からその活動を引き継いでほしいと頼まれたが、山田は無理だと断った。すると妻は「このパンのレシピだったら焼けるから」と一枚のレシピを遺した。妻に先立たれてからのおよそ半年間、山田は悲しみに暮れ、何もできなかったが、近所に住む次男が、2009年の秋から週1回パンを焼き始めた。

2010年1月、山田は、ふと妻の遺したレシピを思い出した。路上生活者に配るパン作りを引き継いでもらいたいと夫に宛て詳細に記されたレシピの最後は、「出来上がり」と元気な言葉で終わっていた。「社会とつながりを持ち工夫して生きていけば一人でも寂しくないよ」との妻からのメッセージだと悟り、毎週水曜日に次男に内緒でひとりパンを焼き、「てのはし」に寄付を始めた。

しかし、2011年3月の東日本大震災後、幼子を抱えた次男夫婦は、放射能の影響を危惧し、京都に移住した。山田も、気持ちが沈み込み、半年近くうつ状態になり、パン作りは中断となった。山田を心配した「てのはし」が、一緒に

パンを焼いてほしい旨電話で申し出た。山田は、料理の得意な主婦ボランティアのような人々が来てくれるものと思っていたが、約束の日自宅に現れたのは、元路上生活者、精神疾患を抱え社会復帰を目指している人々で、パン作りの未経験者ばかりであった。お互い困惑している事に気づき、山田は遠慮深い彼らと打ち解けたいと思い、有り合わせの材料でチャーハンを作り、ふるまった。「おいしい」を連発され、山田も久しぶりに嬉しくなった。そして、彼らにパン作りを始めから教えてみようという気持ちになった。パンを焼く山田と「てのはし」の仲間も、そしてパンを受け取る路上生活者も、お互いの孤独で暗くつらい時期が終わり、何かが始まる。また新たな協働のパン焼き活動に対する、期待と不安、これらが「あさやけ」というイメージにつながった。同年、週1回のパン作りと配布を通じて路上生活者の支援を行う「池袋あさやけベーカリー」が立ち上がった。

秘かにパンを作っている事を知った次男から、パン生地を2次発酵させる「焙炉（ホイロ）」の使い方を教わり、「フワフワでモチモチのおいしい」パンに進化した。妻のパン教室のつながりで山田の応援に来たパン職人の伊藤氏から、アンパンの作り方を教わり、パン生地を包めるようになり、次第にパンのレパートリーが増えた。パンの材料費の足しにするために、山田は、誘われて生協の魚売り場でパートとして働き始めた。

(2-2) 住み開きの誘いと「要町あさやけ子ども食堂」への飛び火

あさやけベーカリーの活動が安定し始めた頃、かつて妻のパン教室の生徒で池袋に住む栗林知絵子氏（以後栗林と記す）が、突然訪れた。栗林は、2012年6月に子ども支援グループ「豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク」を立ち上げたばかりであった。栗林は、この家にひとりで住むだけではもったいないから、子どもたちのために何かやらないかと、山田を誘った。

大田区在住のパン職人伊藤氏に相談すると、自らもスタッフとして参加している近藤の「だんだん子ども食堂」に行こうと誘われ、山田は

2度出かけた。子ども食堂では、まだ都市ガスが通っておらず、七輪で火を起し、味噌汁を作っていた。昭和の一家団欒のような懐かしい暖かさと、準備万端でなくても始められそうな気配を、山田は感じた。そして、自分でもやってみたいと思うようになり、11月に「豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク」の集会に参加し、「子ども食堂とかやってみないな」と小さな声で発言した。すると、子どもの孤食の問題を痛感し、活動の必要性を感じていた栗林が、聞き逃さず、その場で議題に乗せた。

調理師免許を持つ山田は、味噌汁とご飯だけなら自分でも作れるし、ひとりでもやると覚悟を決めていた。食堂を誰と一緒にやりたいかと尋ねられると、山田は子どもの学校PTA時代からの妻の親友であったKさんを挙げた。栗林は、Kさんに子ども食堂の趣旨やこの間の経緯を説明し協力を仰ぎ、以前栗林が自宅で開催していた料理教室の仲間にも、協力を求め、年末には、助成金を申請した。そして、2013年3月、山田とボランティアスタッフは、山田の自宅で月2回、「要町あさやけ子ども食堂」を始めた。

学校でイジメを受けて教室に入れず、保健室登校している女子児童が子ども食堂に来るようになった。次第に食べるだけでなく、食事を運び、皿洗いを手伝ってくれるようになった。更に料理作りに参加し、年少の子ども遊び相手も務めてくれるようになった。親の帰宅が遅く一人で夕食を食べていた子、赤ちゃん連れのひとり親、夫が単身赴任で食事はいつも母子だけで寂しいという親子、多子世帯で夕食準備が大変な親子連れ、近所のアパート住まいの外国籍の子どもなど、多様な人々が利用している。

「だんだん」の子ども食堂の活動が、豊島区に飛び火したことが契機となり、やがて日本全国に広がり始めた。

2. 考察

(1) エンゲストロームの活動モデルの適用

子ども食堂は、歯科衛生士である近藤が、自分の専門職業領域である歯と健康と食につながる仕事を地域で開拓する過程で、地元の小学校の副校長との会話を発端に、2012年8月に開設

された。山田は、定年退職後妻の経営するパン工房で一緒に働くことを楽しみにしていたが、2009年に妻を亡くし、更に2011年3月の東日本大震災後、次男夫婦が京都に移住し、孤独なひとり暮らしとなった。定年後の地域での暮らし方を模索する中で、妻が遺した人脈をきっかけにして、ホームレスの支援団体のメンバーと共にパンを焼き始め、2013年3月から豊島区の自宅でこども食堂を始めた。二人とも、最初からこども食堂を始めようと意図したわけではなく、それまでの生活の積み重ねと、試行錯誤の末に自分の店や家を開き、こども食堂の開設に至ったという点で共通している。

近藤が始めたこども食堂の活動を、エンゲストロームの活動モデルを援用し、図1に示す。なお、エンゲストロームの活動理論において「活動」とは、「主体」の諸々の行為が、「コミュニティ」において、環境の中の「対象」となる目的や動機に向かって連鎖・連関し、「成果」をもたらす構造を指す（山住、2006）。すなわち、協働的实践活動は、人や集団等の「主体」と集团的活動が目指す目的や動機等の「対象」と「コミュニティ」の逆三角形（消費を囲んでいる図の中央部）で示される。こども食堂の活動を規

定しているのは、大きな三角形の頂点にある「道具」としてのこども食堂、「子どもが気軽に入れて、無料または低額でごはんが食べられる」という食堂の「ルール」、そして、活動を構成する献立・調達・調理・給仕・洗い場・アトラクション・広報などの「分業」である。そして、「主体」である有志の市民などは、「道具」であるこども食堂を媒介として、孤食の解消などの「対象」に向かい、「成果」として孤食の子どもなどと出会う。同時に、ルールを媒介として「コミュニティ」とも結びついている。また、「コミュニティ」は、ボランティアによる活動の分業を媒介として「対象」である孤食の解消を図り、成果として孤食の子どもなどの利用者となつながら、

こども食堂の機能を分析すると、有志のボランティアなどが調理し（生産）、孤食の子どもなどの利用者は硬貨などと引き換え、共に食卓を囲み、会話などを交え（交換）、ボランティアは役割を分担し、利用者に料理を配り（分配）、みんなで食べる（消費）。

(2) 拡張的学習サイクルによる分析

次に、活動の展開を示す拡張的学習のサイクルの概念を適用して分析する。これは、実践者

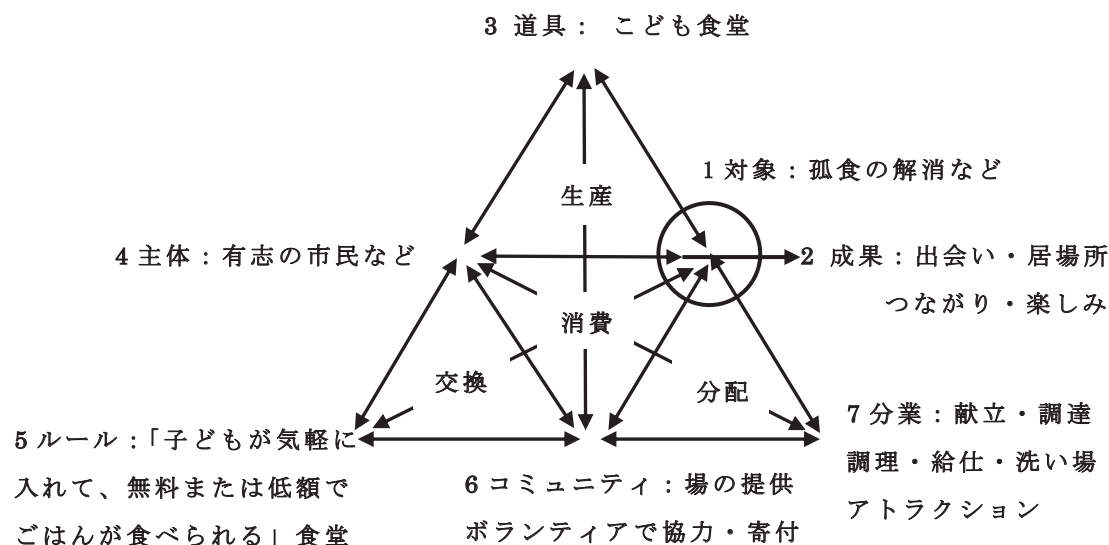


図1 こども食堂の活動モデル

Engeström, Y (1999) p.79, 山住 (2019) p.19を修正して作成

たちが自らの活動をより創造的なものに転換し、生活世界の現実を変えていく過程を描き出し(山住, 2006)、新たな実践活動を集団で創造的に実践していくための協働学習をモデル化した学習理論である(山住, 2014)。これは原則として、番号順に「1. 疑問解決の欲求」、「2. 歴史的な分析・実際の経験の分析」、「3. 新しい解決策のモデル化」、「4. 新しいモデルの検証」、「5. 新しいモデルの実行」、「6. プロセスの反省・隣接するものとの再編成」、「7. 新しい実践の統合・強化」と進展する(Engeström, 2001)。

この拡張的学習サイクルを近藤と山田の事例に適用し、こども食堂開設に至る活動を分析し、表1に示す。

近藤は、新聞社の診療所で歯科診療に従事する中で、熱心に歯磨き指導をしても、社員が生活習慣を変えなければ、歯の健康は改善しない大きな矛盾に直面した。次に、労働生活を終えた社員が地域で健康的な生活に入れるようなシステムを組みたかったが、大きな組織の中では実現できなかった。歯の健康を唱道する歯科衛

生士としての役割が果たせないと近藤は悟った。また、母親が傍にいないと不安がる子どもを家に残す事、母の働く姿を子どもに見せられない働き方にも疑問を持った。

労働の抱える内的矛盾に対して、近藤は自身の働き方を地域でのパート労働に変え、更に商売を始めた。そして、店先で客と交わす会話などから垣間見えた住民の孤独、子どもの不十分な学習環境や見えにくい貧困などの地域の抱える課題に対して、自分の店を提供して改善に寄与しようと活動したことが連鎖して、こども食堂の開設に繋がった。

一方山田は、妻に先立たれ、震災後に息子とも離れ、ひとり残された退職後の第二の人生を如何に生きてゆくか模索する過程で、妻の遺した人脈との交流の中で地域福祉と関わるようになり、自宅で「要町あさやけ子ども食堂」を開設した。ふたりの「疑問解決の欲求」の内容は異なるが、表1に示した協働・学びの拡張的学習の過程を経て、こども食堂の開設に至ったと考えられる。

表1 拡張的学習サイクルによるこども食堂開設までの活動分析

サイクル	近藤の事例(時期)	山田の事例(時期)
1. 疑問解決の欲求	歯と健康と食をつなげる仕事をしたい	妻亡き後、退職後の第二の人生をどう生きればよいか分からなくなった(2009年)
2. 実際の経験の分析①	生活リズムを変えなければ歯磨き指導で社員の虫歯や歯周病は防げない	同窓会では、誰も自分の話を聞いてくれなかった(2010年)
実際の経験の分析②	退職社員のスムーズな地域移行システムは、大組織の中では作れない	妻から託されたパン作りのレシピを思い出し、レシピに込められた妻の想いを考えた
3. 新しい解決策のモデル化	地域の歯科医院・保健所でのパートの仕事に切り替えた(2007年) 請われて、未経験の商売(宅配・八百屋)を始め住民と繋がった(2008年)	妻の遺したレシピで、週1回ホームレス支援のためにパンを焼き始めた(2010年) (東日本大震災後次男が京都に移住し、孤独感でうつ状態になりパン作りを休んだ)
4. 新しいモデルの検証	子どもに請われ、学習支援の場「寺子屋」として店を提供した(2009年)	一緒にパンを焼いてほしいと頼まれ、パン作りを教え、焼く気が湧いた(2011年)
5. 新しいモデルの実行	自分の給料もなく、経費を賄えなかった	楽しく作業すれば、おいしいパンが焼ける
6. プロセスの反省・隣接するものとの再編成	集金の3割分を場所代として貰い、講座も増え、地域交流が盛んになる	焙炉の使い方と具の包み方を教わり、パンがおいしくなり、レパートリーも増えた
7. 新しい実践の統合・強化	バナナの子の話を聞き、食事を提供しなかったが、ノウハウが分からず実現できなかった(2010年)	妻のパン教室の卒業生から、自宅を子どものために開いてみないかと、誘われた(2012年)
	子どもが気軽に入れ、無料/低額で食べられるこども食堂を開設(2012年)	近藤のこども食堂を模倣し、自宅で「要町あさやけ子ども食堂」を始めた(2013年)

(3) ネットワーキングの分析

我々は、他者との交互作用の場である「ノット (knot)」、すなわち「結び目」を日々生成しながら、その連鎖の中で生活している。この「結び目」の働き、すなわちネットワーキングについて、山住は、次のように解説している。

ネットワーキングは、標準化された手続きやスクリプト化された規範から逸脱する、創発的なコラボレーションの新たな形態である。(中略) ネットワーキングは、実践の現場であたかも「即興を交響させる」かのような協働のパフォーマンスである。それは、実践の現場において瞬時に相互行為の「ノット」(結び目)を紡ぎ出し、ほどき、ふたたび紡ぎ出していくといった協働の微細な律動なのである。実際、こうしたネットワーキングは人々の組織や仕事の活動、チームやネットワークを発達的に転換させる上で重要な役割を果たしている。なぜなら、それは、複数の相異なる組織や仕事や文化の間に歴史的かつ現実的に引かれている分断と隔絶の境界線を打破し横断し越境していくダイナミックな水平的運動を実現するからである。ネットワーキングは人々の現場での差し迫った必要から生成される。それゆえ、人々が越境のパフォーマンスへ動いていく現実的な力の即興と持続をそこに見い出すことができるはずである。ネットワーキングという水平的運動は、人々の拡張的なつながり合いを脈打たせるのだ。(中略) ネットワーキングは、互いに隔たった存在の間に瞬時の「結び目」を結び、社会的亀裂を横断して、共に生きる世界への越境を企てる行為である。私たちが生き働き交流する活動は、そのような即興の交響化によって日々更新されていくことになる(山住 2008, pp.49-51)。

「結び目」では、活動する主体は、他者に能動的に働きかけるだけでなく、他者から求められ、請われ、誘われる。更に他者を含む外部環境からの働きかけ(影響)を受けるなど、交互作用

が生じている。そして他者や外部環境からの働きかけをどう受け止めるべきか、主体は自分なりに一定の判断を加えたうえで、次の自分の行動を決めながら対応している。これがネットワーキング(knot working)であると筆者は考える。なお、交互作用とは、互いに変化を及ぼし合い、適応的に変化していく関係である。単なる自己と他者との相互作用ではなく、その状況下で他の相互作用(たとえば自己と他者を包摂する外部環境との相互作用など)によって影響を受けた相互作用を指す。

拡張的学習が生じる際に、自分の活動システムの領域を超えて他の活動システムとの交互作用が起こる。エンゲストロームは、これを越境と呼び、越境の行為としての拡張的学習の理念的・典型的系列を例示している。これらに筆者が付番し、表2に示す。これは、螺旋的に進行するエンゲストロームの拡張的学習のサイクルを、水平的・横向きに展開したものと考えられる(Engeström, 2008)。

次に、この水平次元の拡張的学習の理念的・典型的系列を、近藤と山田の事例に適用し、表3に示す。安定した常勤職を辞して、地元でパート労働を始めた近藤は、医療とは直接関係しない野菜の宅配の仕事に頼まれても、商売をするつもりはなく、断っていた。しかし、実際の労働(契約)は、労働者たる主体と環境たる外界との間の交互作用(交渉)で成立する面があり、自分の理念のみを貫き通すことは難しく、意に反する仕事も引き受けざるをえない事もある。近藤も、断り切れなくなり、歯と健康と食をつなげる仕事になるかもしれないと思い直し、自己資金も商売の経験もないまま、業務請負という形式で未知の流通業に参入した(交渉)。次に、見知らぬ買い物客から野菜を小売りしてほしいと頼まれて、野菜の小売りを始めた(取引)。店先では、孤独に暮らす高齢者や育児にひとり悩む若い母親などと知り合いになった(獲得)。次に自分の娘の学習の躓きを契機に、近所の母親にも声をかけ、夏休みに店で学習会を開いた(相互支援)。学習会に来た子どもから今後も続けてほしいと請われて、講師と相談し「ワンコイン寺子屋」を始めた(協働)。しかし、経費が

表2 越境の行為としての拡張的学習の理念的・典型的系列

系列	内容
I. 挑戦	既存の実践に疑問を投げかけ、拒絶し、挑戦すること
II. 分析	既存の実践を分析すること
III. 協働・相互支援	新しいモデル・概念・人工物・行動パターンを協働的、相互支援的に構築すること
IV. 検証・討論	新たに提案されたモデル・概念・人工物・行動パターンを検証し、討論すること
V. 模倣・獲得	新しいアイデア・概念・人工物・行動パターンを模倣し獲得すること
VI. 交渉・交換・取引	新しいアイデア・概念・人工物・行動パターンに関連する物質的・非物質的な資源を巡って交渉・交換・取引すること
VII. 反省・評価	プロセスの諸相を反省し評価すること
VIII. 統合・強化	成果を統合・強化すること

出典：Engeström（山住訳）「ノットワーキング」第2章拡張的学習の水平次元，pp.111-112, 2008.

表3 本研究の事例で見られた水平次元の拡張的学習の理念的・典型的系列

近藤の事例		山田の事例	
交渉	請われて、野菜の宅配を始める	相互支援	妻に協力し、家事を引き受ける
取引	請われて、店で野菜の小売りを始める	挑戦	妻の遺志でホームレスへのパンを焼く
獲得	店先で、孤独に暮らす地域住民を知る	相互支援	団体と協働し、パン作りを再開する
相互支援	店で子どもの学習会を開く	獲得	焙炉の使い方と、具の包み方を教わる
協働	請われて、講師と学習支援の場を提供	取引	誘われて、生協でパート勤務を始める
検証	経費が高み、店は赤字経営に陥った	相互支援	パンをホームレスに配る活動に参加
討論	集金の3割を場所代に充当しようと提案が出た	交渉	子どものための「住み開き」の提案を受ける
評価	大人の学びの講座も盛んになった	分析	誘われて、こども食堂を2回見学する
挑戦	こども食堂を始める	討論	集会で子ども食堂をやりたいと発言
強化	子どもへの適切な支援を児童館で学ぶ	模倣	自宅でも子ども食堂を始める

嵩み、自分の給料もなく、赤字経営に陥った（検証）。すると、寺子屋の講師から、集まったお金の3割を場所代に充当しようと提案があった（討論）。大人からも学びのニーズが出始めて、講座が盛んになり、経営にもプラスになった（評価）。ある日、小学校の副校長からバナナの子の話聞き、思いあぐねた末、およそ1年半後、見切り発車的にこども食堂を始めた（挑戦）。子どもと継続的に関わり始め、子どもへの適切な関わり方を児童館で学び始めた（強化）。

山田は、当初妻の始めた天然酵母を使ったパン作りが本格化するにつれて家事を引き受けたが、2005年頃からは妻の働きで一家の生計が支えられた（相互支援）。妻の死後、自身の生き方を模索する中で、妻の遺志を汲み、無理だと考

えていたホームレス支援のためのパン作りを始めた（挑戦）。東日本大震災後、うつ状態に陥り、中断したが、ホームレス支援団体のメンバーと一緒にパン作りを再開した（相互支援）。次男から焙炉の使い方を、妻のパン教室のつながりでパン職人からは具の包み方を教わり、パンがおいしくなり、レパートリーも増えた（獲得）。製造個数の増加に伴う原材料費を賄うため、誘われて生協の魚売り場でパート勤務を始めた（取引・交換）。山田もホームレス支援団体の活動に同行し、一緒にパンを配り始めた（相互支援・協働）。ある日、妻のパン教室の卒業生から、地域の子どものために自宅を開いて活動してみないかと「住み開き」の提案を受けた（交渉）。パン職人に相談し、誘われて、近藤のこども食堂

の見学に出かけた（分析）。子ども支援団体の集会に参加し、「子ども食堂」をやってみたいと発言し、直ちに議論が始まった（討論）。そしてボランティアと協働し、自宅で「要町あさやけ子ども食堂」を始めた（模倣）。

近藤は、歯科衛生士としての職業経験と自らの育児経験を自分の強みとして生かし、ライフワークとして「歯と健康と食のつながり」を追求した。更に活動の場を地域に移した後は、その働きがもたらす利益を積極的に地域コミュニティに還元しようと努めた。その生き方は、近藤自身が培った歴史・文化的な産物であるとも理解される。これを縦糸にして、地域で店を構え、生計を営む中で出会う客や住民との関わりを横糸にして、この両者の交点である結び目（ノット）で生じた交互作用が連鎖して、こども食堂が生まれたともいえる。近藤は、自分の店を拠点に地域コミュニティに向けて始めた一連の活動について、「どれも」店を始めてから自然に思いついて、いろんな方との出会いの中で実現したものばかりで、『～やりながら』の思いつきが多い」と語っている（川口，2011）。

同様に、山田の事例では、健康と食の安全にこだわった天然酵母のパン作りで地域に貢献した妻亡き後の第二の人生の生き方を模索する過程を縦糸に、福祉関係者を含む妻の遺した人脈との関わりを横糸にして、こども食堂が紡ぎ出されたといえよう。二人の違いをあえて指摘するならば、こども食堂の活動動機について、近藤は地域で孤食を防ぐ点に置いたが、山田は自分自身を含めて地域で孤立せずに生活を共に楽しむところに置いている。

このように、結び目（ノット）では、交互作用として多様なやり取りが交わされていることが分かる。交互作用の持つ性質として、相手の働きかけに対する応答が、案外多くを占めているとも考えられる。活動について、主体自ら積極的に働きかけていく行為であると考えがちであるが、少なくとも今回取り上げた近藤と山田の事例では、結び目で他者から請われ、誘われたことが契機となって、活動が新たなフェーズに移行する場面が多く見受けられた。今回の分析の結果、外部への応答としての活動が占める

比率は、意外に高い可能性が示された。

（4）「住み開き」としてのこども食堂

近藤と山田には、「人間は分かち合い、助け合い、共に生きる者として存在する」という人間観が共通してみられる。これがなければ、自分の店や家を地域に開き、こども食堂を始めることもなかったと考えられる。

自分の家を転用（店を開く場合も含む）し、地域コミュニティに向けて開くことを、アサダは「住み開き」と呼び、その共通点として、「無理せず、自分のできる範囲で自分の好きなことをきっかけにちょっとだけ開いていること」を挙げている（アサダ，2012）。

住み開きの意義について、坂倉は、コミュニティマネジメント、すなわち、つながりをつくることによる全体的生活価値の向上と述べ、その特徴として次の3点を挙げている。①つながりのプラットフォーム（多様な人々が安心して一緒にいられて、自分の思いや考えを自由に話せて、お互いのことを認め合うことができる出会いの場所）、②地域資源と活動を両輪にする（場所だけ決めてもメンバーが固定化し活動が停滞し、活動だけでも続かない）、③ひらいただけで人が集まり、なにかが始まる（坂倉，2018）。

紙幅の関係で詳述できないが、近藤と山田のこども食堂には、教育・福祉関係を中心に見学希望者が相次ぎ、全国から食材が寄贈され、ボランティアも集まり、山田の自宅の2階は子ども用の図書室としても利用されている。

おわりに

今回、草の根の人々によるこども食堂の活動実践の立ち上がりを観察する中で、結び目では、その人や組織の生い立ちや経験、性質、態度、情動・感情、他者への自己の開き方など多種多様な要素が混然一体となって交互作用し、多様なやり取りが交わされていたことが明らかになった。

俯瞰すれば、近藤と山田のこども食堂は、地域の子どもたちと、時間と空間を共有し、ひとときを過ごす「居場所」として、自分の所有する資源である店や家を開き、食事を提供する場

といえる。近藤と山田の果たす役割とは、子どもたちが自由に集い、知り合って新しい友達となり、ボランティアとして食堂運営に協力する地域住民とも知り合いになれる「結び目」としてのこども食堂の創発、すなわちネットワークである。つながりを作るのは、あくまでも子どもや地域の大人たち自身であり、近藤と山田は媒介するに過ぎないといえる。

結び目(ノット)で生じている交互作用の性質上、良い活動とは、良い応答でもあるといえるのかについては、エンゲストロームが活動理論で「対話」を重視している点(Engeström, 1999, p.9)や、活動の評価方法などを含めて、今後更に検討する必要があると考える。

さて、なぜこのこども食堂の活動が、一種の流行のように急速に日本全体に広がったのだろうか。近藤と山田の著作を読むと、二人ともこれほど大きな反響を呼ぶとは予想していなかったようである。また、こども食堂が包摂する福祉的な意義や課題についても、本稿では言及できなかった。筆者の今後の研究課題としたい。

引用・参考文献

アサダワタル (2012). 「住み開き 家から始めるコミュニティ」 p.14, 筑摩書房.

中央法規 (2018a). 「けあサポ 専門職応援 福祉の現場で 思いをカタチに～私が起業したわけ・トライしたわけ～第4回① 近藤博子 気まぐれ八百屋 だんだん店主」 2018年12月6日. <https://www.caresapo.jp/senmon/fukushi-omoi/40181> 2020年2月25日アクセス.

中央法規 (2018b). 「けあサポ 専門職応援 福祉の現場で 思いをカタチに～私が起業したわけ・トライしたわけ～第4回③ 近藤博子 気まぐれ八百屋 だんだん店主」 2018年12月20日 (WEB).

Engeström, Y (1999). Learning by expanding: An activity-theoretical approach to developmental research. 山住勝広・百合草禎二他訳, 『拡張による学習』(第1章 pp.5-19), 新曜社.

Engeström, Y (2001). Expansive Learning at Work: Toward an activity theoretical reconceptualization. FIG. 11. Strategic learning actions and corresponding contradictions in the cycle of expansive learning. *Journal of Education and Work*, 14(1), 133-156.

Engeström, Y 山住勝広訳 (2008). 「拡張的学習の水平次元—医療における認知的形跡の編成」『ネットワーク 結び合う人間活動の創造へ』(第2章 pp.107-113), 新曜社.

坂倉杏介 (2018). 「2017年9月26日 都市想像会議 第10回『家をひらく×都市』都市で家をひらくとは? 議事録」特定非営利活動法人シブヤ大学(東京都市大学 坂倉杏介研究室). <http://sakakuralab.com/180202shibuyadaigaku/> 2020年3月2日アクセス.

川口和正 (2011). 「Work Goes On! —リスタートの人生(第8回) 歯科衛生士から八百屋に転身 町の子どもと大人が集う場をつくる 気まぐれ八百屋だんだん 近藤博子さん」『企業診断』58(10): 52-55, 同友館.

近藤博子 (2010). 「きまぐれ八百屋だんだん ブログ」2月21日, 8月15日. <https://ameblo.jp/kimagureyaoyadandan/entry-10464312337.html> 2020年2月25日アクセス.

近藤博子 (2016a). 「子どもの居場所をつくり、孤立を防ぐ—『こども食堂』第1号店からの発信—」『月刊保団連』(全国保険医団体連合会) (通巻1225): 29-35.

近藤博子 (2016b). 「地域で子どもを支える『こども食堂』」『教育と医学』64(9): 794-802.

近藤博子 (2016c). 「地域をつなぐ『気まぐれ八百屋 だんだん』のこども食堂」『協同の発見』(通巻279): 35-43, 協同総合研究所.

近藤博子 (2017). 「食からこども・地域を支える 人がつながる地域の居場所 “こども食堂”」『看護』69(1): 74-76, 日本看護協会.

近藤博子 (2018). 「日々の生活に寄り添える場所の再構築」『更生保護』69(11): 2-5.

近藤博子 (2019). 「だんだんワンコインこども食堂の歩み」大田・生活者ネットワーク主催「みんなでつろう! 子どもが輝くまち・大田『子どもの笑顔を社会の真ん中に!』」2019年2月17日 https://www.youtube.com/watch?v=MYx_Z3lvoHE 2020年2月25日アクセス.

近藤誠 (2011). 「石油危機後の経済構造調整とグローバル化への対応 (1970年代～84年を中心に)」『バブル/デフレ期の日本経済と経済政策』(第1部 第5章 金融自由化 pp.70-89), 内閣府社会経済総合研究所.

宮崎義一 (1995). 「国民経済の黄昏『複合不況』その後」 pp.158-159, 朝日新聞社.

みずほ情報総研 (2012). 「一人暮らし高齢者・高齢者世

- 帯の生活課題とその支援方策に関する調査研究事業報告書」。
- 内閣府 (2019). 「社会意識に関する世論調査」平成31年2月調査 2019年4月5日.
- 山田和夫 (2015). 「妻が遺した1枚のレシピ」青志社.
- 山住勝広 (2006). 「創造的な学習活動のためのクロス・スクール・ワーキング—第3世代活動理論からのアプローチ—」『拡張的学習と学校システム開発の介入研究—活動理論的アプローチ—』科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書(研究課題番号: 17330172), pp.1-24.
- 山住勝広 (2008). 「ネットワークからネットワークングへ—活動理論の新しい世代」『ネットワーク 結び合う人間活動の創造へ』序章 pp.49-51, 新曜社.
- 山住勝広 (2014). 「拡張的学習とネットワークする主体の形成—活動理論の新しい挑戦—」『組織科学』48(2): 50-60.
- 山住勝広 (2019). 「学校における子どもたちの拡張的学習の生成—学習活動を創り出すエージェンシーの発達に向けて—」『活動理論研究』4: 17-27.

